

は大石田に転居したが、そこで、左湿性肋膜炎という大患になり、肋膜に溜まった二千CC余の水を採取した。晩年茂吉の老いは、門弟の板垣家子夫『斎藤茂吉随行記』、佐藤佐太郎『斎藤茂吉言行』、田中隆尚『茂吉随聞』の日録により肌で感ずる。その後、帰京するが、茂吉は医学者らしく「わが細胞は刻々死するを」と自己の肉体を冷徹に見つめ、老いがあるがままに受容する諦念が凝縮されているようだ。そして、脳軟化症による左半身不全麻痺となり、さらに認知症が茂吉を襲った。茂吉の記憶力は低下し、「手帳の置場所を幾度にも」忘れ、その姿を周囲にも示すが、作歌の創作意欲は衰えなかった。茂吉は、身体を檻樓となるまで酷使するが、作歌することで自己の老いを解放し昇華していった。

フリッチョフ・シュオンと井筒俊彦

中村 廣治郎

シュオンについては前回報告し、井筒については日本ではよく知られているので、その紹介は省略する。両者とも二十世紀をほぼカバーする同世代人であり、問題関心も近く、共通点も多い。しかし、片やスーフィー教団のシャイフ(教主)としての身分をもつ学者としてのシュオンと、片やイスラム神秘哲学を中心とする東洋哲学や言語学・比較哲学の研究者・哲学者としての分に徹した井筒、という生活スタイルの違いからか、そ

こに何らかの関係があったとは思えない。諸宗教はその深奥の根元においては皆一つである、というのがシュオンの基本的思想であるが、そのことを彼は神道や北米インディアン宗教も含めたさまざまな宗教について検証しようとして多くの著作を残した。

シュオンは、この現象的存在の根元にある不可知のものを the Absolute, Beyond-Being などと呼ぶが、それはそのままの形で存在するのではなく、常に一定の順序の下に自己を外化顕現し、現象世界に至る。このことは諸宗教に共通するもので、これを esotericism と呼ぶ。諸宗教の違いはただ絶対者が自己を分節化していくその象徴的形式だけである。この形式的側面をシュオンは exotericism、ないしは upāya と呼び、また人間はこの形式を絶対者の顕現としてではなく、実在そのものと見誤ってしまうことから māya と呼んでいる。

井筒の「東洋哲学」も基本的には同様で、一切の言語的差異化・分節化を超越した絶対不可知の境地、彼のいう「存在のゼロ・ポイント」「絶対的神秘」の段階的な存在顕現の結果として日常的現象世界を捉える。また、シュオンも、不二一元論におけるアトマンとしての人間の主観的側面についても議論しているが、井筒の特徴は、そのようなアリテイの展開を人間意識の認識論的变化に明確に対応させて論じていることである。「存在のゼロ・ポイント」に対応する「意識のゼロ・ポイント」、自我意識・主客の区別が完全に消滅し、すべてが一つになった無・意識はやがて日常的意識へと下降するのである。それを井筒は次のように図式化する…「分節(一)――無分節

第6部会

↓分節(二)。彼は、絶対無分節の境位を経たあとの「分節(二)」には、全存在の無分節の一体性の意識が残っていると(禅でいう「無分別の分別」、スーフィーのいう「バカー」、シュオンがmayaとしてそれを否定的にみるのに対して、積極的に評価する。以上が、井筒のいう「東洋哲学」の基本構造(メタ哲学)である。

いま一つの特徴は、井筒の思考における言語の役割の重要性である。まず、「存在・意識のゼロ・ポイント」の自己顕現のプロセスは言語による分節化として捉えられる。さらに、このように最終的に分節化され記録されたテキストを読み解く方法として意味論を強調し、自らそれを適用するだけではなく、人間の深層意識にまで掘り下げ、そこに言語形成の根元を見出し(「言語アーラヤ識」、言語現象をダイナミックに捉え直そうと試みている。

片や esoterism、片や東洋哲学と名称は異なるが、その実質的内容は同じ。つまり神秘主義である。シュオンがそれを esoterism と呼ぶのは、洋の東西を問わずそれが普遍的現象であり、各宗教の「伝統」によって伝えられてきたと考えるからである。だが近代科学文明がこれを変える。本来、それと不可分に結びついていた exoterism がそれから分離され、exoterism だけが重視され、経験科学的に再解釈され、「伝統」が失われてきた。そこでシュオンは、この「伝統」の回復を主張する。他方、井筒の場合、ロゴス中心主義的な西洋哲学(シュオンのいう「ヨーロッパ哲学とセムの exoterism」)に対置される東洋哲学(同「セムの esoterism とアジアの形而上学」)、そ

して西洋哲学が行き詰まり、ポスト・モダンの時代に東洋哲学の果たすべき役割の、東洋人としての自覚がこめられている。